

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第二十一章）

壊は、生起が無くしてか、  
一緒にまさしく有るのではない。  
生起は、壊が無くしてか、  
一緒にまさしく有るのではない。 1

壊は、生起無くして、  
如何様に有るとなろうか。  
生まれることなく死ぬことになる。  
壊は、生起無くして無い。 2

壊は、生起と一緒に、  
如何様にまさしく有るとなろうか。  
死は生と同一時に、  
まさしく有るのではない。 3

生起は、壊無くして、  
如何様であれば有るとなろうか。  
諸事物において無常性は、  
いつ時も無いのではない。 4

生起は、壊と一緒に、  
如何様にまさしく有るとなろうか。  
生と死は同一時に、  
まさしく有るのではない。 5

互いに一緒か、  
互いに一緒ではなく、  
成立したものは有るのではない。  
それらの成立が、如何様に有ろうか。 6

尽きたものに生起は有るのではない。  
尽きていないものにも生起は無い。  
尽きたものに壊は有るのではない。  
尽きていないものにも壊は無い。 7

事物が有るのではなく、  
生起と壊は有るのではない。  
生起と壊無くして、  
事物は有るのではない。 8

壊は、生起無くして、  
如何様に有るとなろうか。  
生の無い死のように、  
壊は、生起無くして無い。(仏)

壊は、生起と一緒に、  
如何様にまさしく有るとなろうか。  
死は生と同一時に、  
まさしく有るのではないが如く。(仏)

生起は、壊無くして、  
如何様にまさしく有るとなろうか。  
諸事物において無常性は、  
いつ時も無いのではない。(仏・顕)

生起は、壊と一緒に、  
如何様にまさしく有るとなろうか。  
生と死は同一時に、  
まさしく有るとは正しくないが如く。(仏)

生起と壊無くして、  
事物は有るのではない。  
事物が有るのではなく、  
生起と壊は有るのではない。(仏)

空において、生起と壊は  
まさしく合理ではない。  
不空においても、生起と壊は  
まさしく合理ではない。 9

生起と壊が、  
まさしく同一であるとは不合理である。  
生起と壊は、  
まさしく他であるとも不合理である。 10

生起と壊は、  
見ると君が思うならば、  
生起と壊は、  
まさしく愚痴によって見られるのである。 11

事物は事物より生じず、  
事物は無事物より生じない。  
無事物は無事物より生じず、  
無事物は事物より生じない。 12

事物は事物より生じず、  
無事物は事物より生じない。  
事物は無事物より生じず、  
無事物は無事物より生じない。(仏)

事物は我より生じず、  
まさしく他より生じるのではない。  
我と他より生じることは、  
有るのではない。如何様に生じるとなろうか。 13

事物が有ると承認したならば、  
恒常と断滅の見解となる  
背理となる。その事物とは、  
恒常と無常になる故である。 14

事物が有ると承認したとしても、  
断滅にならず、恒常にならない。  
果と因の生起と壊の、  
その継続が有（輪廻）である故である。 15

果と因の生起と壊の  
その継続が有であるとなれば、  
壊に再び生じることは無い故に、  
因は断滅する背理となる。 16

事物は自性があるならば、  
無事物となることは正理ではない。  
涅槃の時には断滅する。  
有の継続が良く寂滅する故である。 17

最後が滅したとなれば、  
最初の有は正理とならない。  
最後が滅したとならない時、  
最初の有は正理とならない。 18

もし、最後が滅しつつある時、  
最初が生じるとなるならば、  
滅しつつあるとは一となり、  
生じつつあるも他になる。 19

もし「滅しつつある」と「生じつつある」が、  
一緒であるとも正しくなければ、  
死ぬとなる或る蘊において、  
それに生も起こるとなるのか？ 20

そのように三時においても、  
有の継続が正理でなければ、  
三時において無いもの、  
それが如何様に有の継続となろうか。 21

「起壊を考察する」という第二十一章である。

(第二十二章)

蘊ではなく、蘊より他でもない。  
それに蘊は無く、それにそれは無い。  
如来は蘊を具えるものではない。  
如来は如何なるものであるか。 1

もし、仏陀が蘊に  
依拠して、本性より有るのでなければ、  
本性より無いものは、  
それが他の事物より何処に有ろうか。 2

他の事物に依拠してあるものは、  
それが我性であるとは不合理である。  
我性の無いそれが、  
如何様に如来となろうか。 3

もし、本性が有るのでなければ、  
他の事物が有ると、如何様になろうか。  
本性と他の事物、  
以外のその如来とは何であるか。 4

滅したとなった最後は、  
最初の有に結生するとならない。  
滅したとならない最後は、  
最初の有に結生するとならない。(仏)

もし「滅しつつある」と「生じつつある」が、  
一緒に結生することも有るのでなければ、  
死ぬとなる或る蘊において、  
それに生も起こるとなる。(仏)

御身ではない。御身より他でもない。  
それに御身は無い。それはそれに無い。  
如来は御身を具えるのではない。  
如来は何ものであるか。(仏)

もし、仏陀が蘊に  
依拠して、自性より無ければ、  
自性より無いものは、  
それが他の事物より何処に有ろうか。(仏)

他の事物に依拠してあるものは、  
まさしくそれらであるとは不合理である。  
我性の無いそれが、  
如何様に如来となろうか。(仏)

もし、自性が無ければ、  
他の事物が有ると、如何様になろうか。  
自性と他の事物、  
以外のその如来とは何であるか。(仏)

もし、蘊に依拠しておらず、  
如来が何か有るならば、  
それは、やっとならば、  
依拠して、それからそうなるに至る。 5

諸蘊に依拠しておらず、  
如来は何も無い。  
依拠していないものが有るのでなければ、  
然れば、如何様に近取となろうか。 6

近く取られたのでないものは、  
近取であると、何故ならないのか。  
近取の無い  
如来は何も無い。 7

五様相で探求したならば、  
そのものか、まさしく他として、  
無いその如来は、  
近取によって如何様に名付けられようか。 8

近く取られるものは、  
それは本性より有るのではない。  
我の事物より無いものは、  
それが他の事物より有ることは全くない。 9

そのように、近く取られるものと近取者は、  
一切の様相として空である。  
空であるので、空である如来を、  
如何様であれば名付けるとなろうか。 10

「空である。」とも述べず、  
「空ではない。」ともしない。  
二つとも、二つともでないともせず、  
仮設される意味として述べよう。 11

恒常と無常等の四つが、  
寂滅したこれに、何処に有ろうか。  
辺と無辺等の四つが、  
寂滅したこれに、何処に有ろうか。 12

如来は有ると、  
密な思い込みで捉えた者。  
彼は、涅槃について、  
「無い」という分別で考える。 13

諸蘊に依拠せず、  
如来は何も無い。  
依拠していないものが有るのでなければ、  
それは、如何様に近取となろうか。(顯)

近く取られるものは、  
それは自性より無い。  
我の事物より無いものは、  
その如く事物より有ることは全くない。(仏)

そのように、近く取られたものと近取者は、  
一切の様相として空である。  
空であるので、空である如来を、  
如何様であれば名付けるとなろうか。(顯)

## 根本中論

本性が欠如するそれに、  
仏陀は涅槃を得てから、  
「有る」というか「無い」という、  
思索はまさしく合理とはならない。 14

自性が欠如するそれに、  
仏陀は涅槃を得てから、  
「有る」というか「無い」という、  
思索はまさしく合理とはならない。(仏)

戯論を超えて、  
無尽である仏陀について戯論を為す、  
戯論によって衰えた全ての者が、  
如来を見るとはならない。 15

如来の本性であるもの、  
それはこの衆生の本性である。  
如来は、本性が無い。  
この衆生の本性は無い。 16

如来の事物そのものであるもの、  
それはこの衆生の自性である。  
如来は、事物そのものが無い。  
この衆生は自性が無い。(仏)

「如来を考察する」という第二十二章である。

※(中)は、『根本中論』新訳(パツァブ訳)で、蔵比較編集版と異なる記述。

(仏)は、『根本中論』チョコロ訳(『ブッダパーリタ』に引用された旧訳)で、パツァブ訳(新訳)と異なる記述。

(顕)は、パツァブ訳(新訳)ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顕句論』で引用された偈を示す。

## DECHEN 訳